

Title	Crossing Borders : Race/Gender/Class in Early Asian American Literature
Author(s)	松本, ユキ
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/50575
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏名 (松本 ユキ)

論文題名

Crossing Borders: Race/Gender/Class in Early Asian American Literature
(初期アジア系アメリカ文学における人種/ジェンダー/階級の越境)

論文内容の要旨

アジア系アメリカ文学研究は、今日に至るまで、様々な変遷をたどってきたが、個々の作家研究に留まらず、移民の集団的経験を物語るものとして、その国内外の歴史的・政治的・文化的背景を複合的に論じてきた。また人種の問題だけでなく、民族性、階級、ジェンダー、セクシュアリティなどの重層的な要素によって個々の経験、記憶、物語、歴史が形成されていることを明らかにしてきた。本研究においては、Sui Sin Far、Younghill Kang、Carlos Bulosan、Hisaye Yamamotoの作品を中心に提起し、彼らの作品における人種、ジェンダー、階級といったテーマについて考察した。四人の初期アジア系アメリカ作家に焦点を当てることで、今日のアジア系アメリカ文学にも見られるような「越境的」な視点や文化実践がいかに人種/ジェンダー/階級の境界の重なりや相互作用を提示しているのかを検討した。

本論文は、1880年代から1960年代に出版された作品を初期アジア系アメリカ文学と定義している。1882年の中国人移民排斥法から始まり1965年の移民法の改正まで、アジア系のアメリカへの移民は排斥され厳しく規制されてきたという歴史的背景がある。しかし、1965年の移民法の改正後、「アジア系アメリカ人」の定義はより多様化した。それ以前はアジア系というと、中国系、朝鮮系、日系、フィリピン系に限定されていたが、移民法の改正を受け、移民の出身国は益々多様化した。また、初期のアジア系移民たちは、男性が単身で出稼ぎ労働者としてアメリカへ渡ることが多かったが、今日では女性の割合も増え、教育レベルや職業にも変化が見られるようになってきた。

初期アジア系アメリカ文学に対しては様々な批判が行われてきた。特に1990年代ごろから、国内的視点からディアスポラな視点への移行について、議論されるようになった。このことは、アジア系アメリカ文学のテキストが、東アジア系のアメリカ生まれの男性作家の作品に限定される傾向があり、男性性や異性愛中心主義を強調するものであったという反省に基づいている。このような取捨選択された狭義でのアジア系アメリカ文学は、1960年代以降に益々多様化していったエスニシティ、ジェンダー、セクシュアリティ、階級などの要素を捉えきれておらず、アメリカという国家を超えたディアスポラな動向を反映していないとの指摘がなされてきた。

しかしながら、初期のアジア系アメリカ文学において、国家の枠組みを超えた視点や人種、ジェンダー、階級の多様性が全く見られないわけではない。特に本論文で扱った先駆的な作家たちは、今日の社会的な背景と照らし合わせて考えてみても、「越境的」な視点を持っていたと言えるだろう。したがって、本論文の目的は、アジア系アメリカ文学の形成の過程で見落とされてきた、初期アジア系アメリカ文学の「越境性」を再考することにある。文学テキストをさまざまな個々の文化的実践や社会的政治的背景と照らし合わせて解釈することにより、アジア系アメリカ文学の過去と現在の形態を比較し、その歴史的今日的意義について考察することは有益であると考えられる。

本論文は序論、四つの章、そして結論から成っている。序論においては、初期アジア系アメリカ文学についての概観を述べ、本研究の目的や意義について検討した。第一章では、中国人の母とイギリス人の父をもつユーラジアン作家、Edith Eaton/Sui Sin Farに焦点を当てた。幼少期をカナダで過ごした彼女は作家となるためにアメリカへ渡るが、カナダとアメリカの双方で、排斥され、差別されている中国系移民の苦境を多くの短編において描いている。例えば、ある短編において、カナダとアメリカの国境を超えることで「密入国」する中国人移民の姿を描き出している。現実世界では、「不法な」侵犯行為であり、排斥されるべきものとして捉えられる中国系移民の越境を、白人の英雄たちによるロマンチックな冒険と対峙させて書き直すことにより、北米社会における人種間の不平等を明らかにしている。更には、異性装により越境を可能にしようとする中国系女性の表象を通じて、人種だけでなく、ジェンダーやセクシュアリティといった要素を地理的な境界線と重ねあわせている。また、Sui Sin Farは、新聞記者としてジャマイカに短期滞在した経験をもとに、物語を創作している。特権階級の白人男性の権力に抵抗する現地の混血女性の姿を通じて、アメリカの帝国主義を批判的に捉えている。彼女の描く越境の物語は、帝国主義の影響下における、人種、ジェンダー、階級などの不平等な力関係を暴いている。Sui Sin Farは、「ユーラジアン」としてヨーロッパとアジアの間から自らを位置づけるだけでなく、自らの移動の経験を通じて、カナダとアメリカ、アメリカと中国、アメリカとジャマイカなど様々な境界を重ねあわせている。

第二章においては、朝鮮系アメリカ文学の父祖とよばれているYounghill Kangの自伝的小説*East Goes West*を中心に論じている。日本による朝鮮の植民地化や西洋からの外圧などの要因で、東から西へ向かった朝鮮系の移民あるいはエグザイルが、アメリカにおいて経験した人種差別や経済的困難などをいかに表象しているのかを分析した。*East Goes West*において、George、Han、Kimの姿を通じて描かれる朝鮮人エグザイルたちは、物理的、精神的なホームとしてのアメリカを追い求めるが、人種主義や物質主義によりアメリカ社会へのアクセスを幾度も阻まれる。周縁的な位置からアメリカにおける自分たちの居場所を見出そうとする三人の旅路は、様々な空間、時間、他者との関係性によって経験されており、彼らはそれに伴い自分自身を流動的に変化させている。*East Goes West*という作品は、アメリカでの経済的上昇を追い求める移民や、自らの祖国、伝統、文化などを喪失したエグザイルなど、多様な個人による移動の経験を描き出すことで、西洋と東洋、伝統と近代、女性と男性、個人と集団といった普遍的な対立を解きほぐし、様々な歴史化、地域化、個別化されたアメリカ像を描き出している。

第三章では、フィリピン系移民を代表する作家であるCarlos Bulosanの自伝的小説*America Is in the Heart*を第三世界文学として読み解く。中国系や日系移民の排斥がすすむ中、1930年ごろから、新たな労働力を担う存在として、フィリピンからアメリカへの移民が増加した。当時、フィリピンはアメリカ領土の一部であったにも関わらず、他のアジア系移民と同様に、フィリピン系移民もアメリカ社会における人種差別や経済的困難を経験した。Bulosanは、このようなフィリピン系労働者たちの闘争を中心に、当時のアメリカ社会を描き出している。また、彼が焦点を当てた労働者階級の闘争は、1960年代以降に台頭するアジア系アメリカ運動に大きな影響を与えた。その一方でBulosanは、階級の重要性を強調するあまり、女性たちの声を排除しているとの批判がなされてきた。作品の主人公であるAllosは、自分たちの現状を改善しようと闘っているフィリピン系の労働者たちのために、作家となることを決意する。しかしながら、Allosが作家となるために献身的に援助してくれるのは女性たちである。Allosは白人女性に後押しされて、様々な著作に触れ、世界文学や国際政治への理解を深めていく。またフィリピンの母親や妹を思い出すことで、自分がアメリカで学んだことをフィリピンの人々に伝えなければならないと考えるようになる。一見すると、Bulosanの定義する労働者は、アメリカで搾取されるフィリピンの男性に限定されているように思えるが、他の人種やジェンダーにも開かれている可能性を秘めているように思う。

第四章においては、日系二世作家のHisaye Yamamotoの短編を中心に分析した。彼女の文章を通じて、大恐慌、第二次世界大戦、強制収容、戦後の再定住、公民権運動などの歴史的出来事が個々の経験にどのような影響をもたらしているのかを検討した。特に、一世と二世の世代間の関係性や異人種間の対立や連帯などの表象を中心に、人種/ジェンダー/階級などの要素がどのように絡み合っているのかを明らかにした。Yamamotoの作品は、日系社会内の世代間の対立や家父長的社会での女性の抑圧を描いていると解釈されることが多かったが、それらの問題は日系社会にとどまらず、アメリカ国内外での政治的な動きと連動していることが示唆されている。また、異世代間の関係だけでなく異人種間問題にも言及しており、個々人の関係性は人種だけでなくジェンダーや階級などの要素とともに形成されている。彼女の作品においては、人種差別、女性の抑圧、労働者の搾取などの問題はどの社会、共同体、集団にも偏在しており、それらの負の経験は個々人を結び付け、互いの立場を理解し、共感させる力を持ち合わせていることが提示されている。作品の中ではっきりとは述べられていないが、大恐慌下での経済的困窮、日系人の強制収容、二世の従軍経験、再定住の困難などの経験は、日系社会が異人種間の対立や連帯をより意識する要因となっており、人種だけでなくジェンダーや階級の問題に対しても批判的視点を培うきっかけとなっているように思う。Yamamotoの描く日系女性の越境的な視点は、人種/ジェンダー/階級などの差異を超えて、国内外での政治的な動きの中で翻弄される様々な個々の経験をつなぎ合わせようとしている。

初期アジア系アメリカ文学は、国内外の政治的社会的状況が個々の経験に及ぼす影響や人種/ジェンダー/階級の境界の重なりや相互作用に意識的であり、様々な越境的な視点を提示していると言えるだろう。本研究が、アジア系アメリカ研究の中で見過ごされてきた初期アジア系アメリカ文学の越境性、つまりは国内外の歴史的背景の相関性、異人種間の関係性、人種/ジェンダー/階級などの境界の相互関係などについて考えるきっかけとなれば幸いである。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (松 本 ユ キ)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教 授	ジェリー ヨコタ
	副 査	准教授	山 本 佳 樹
	副 査	教 授	森 祐 司

論文審査の結果の要旨

本論文 (*Crossing Borders: Race/Gender/Class in Early Asian American Literature*)は、四人のアジア系アメリカ人作家 (Sui Sin Far、Younghill Kang、Carlos Bulosan、Hisaye Yamamoto) の作品における人種、ジェンダー、階級といったテーマについて考察した研究である。

従来のアジア系アメリカ人文学研究では東アジア系のアメリカ生れの男性作家の作品に限定される傾向があった。1990年代ごろから、国内的視点からディアスポラ的な視点へ移行するようになってジェンダー意識も高まったが、戦後の作品を対象とする傾向が続いた。本論文では筆者が、このような現代的アプローチをアジア人の初期移民時代の作品に適用しながら、それだけでは捉えきれない、その時代特有の「越境性」に焦点を当てることにより、新しい解釈の可能性を提示している。

序論においては、初期アジア系アメリカ文学についての概観を述べ、本研究の目的や意義について述べている。

第一章では、中国人の母とイギリス人の父をもつユーラシアン作家、Edith Eaton/Sui Sin Far に焦点を当てている。カナダとアメリカの双方で、排斥され、差別されている中国系移民が異性装により越境を可能にしようとする「密入国者」を描いた作品や、Sui Sin Far 自身の新聞記者としての経験をもとにした物語に出てくる現地の混血女性の姿を検討することにより、作者の人種、ジェンダー、階級などの不平等な力関係の描きだし方に新しい光を当てている。

第二章においては、朝鮮系アメリカ文学の父祖とよばれている Younghill Kang の自伝的小説 *East Goes West* を中心に論じている。日本による朝鮮の植民地化や西洋からの外圧などの要因で、東から西へ向かった朝鮮系の移民あるいはエグザイルが、アメリカにおいて経験した人種差別や経済的困難などをいかに表象しているのかを分析することで、西洋と東洋、伝統と近代、女性と男性、個人と集団といった普遍的な対立を解きほぐし、様々に歴史化、地域化、個別化された作者のアメリカ像を論理的に脱構築している。

第三章では、フィリピン系移民を代表する作家である Carlos Bulosan の自伝的小説 *America Is in the Heart* を第三世界文学として読み解いている。中国系や日系移民の排斥がすすむ中、1930年ごろから、新たな労働力を担う存在としてフィリピンからアメリカへの移民が増加した背景を解説した上、Bulosanの描いたフィリピン系労働者の主流社会との間の不平等な力関係を乗り越えるための文学的想像力を評価しながら、女性たちの声や、他の人種にも開かれている可能性を秘めているところに着眼し、総合的に考察している。

第四章においては、日系二世作家の Hisaye Yamamoto の短編の分析を試みている。大恐慌、第二次世界大戦、強制収容、戦後の再定住、公民権運動などの歴史的出来事が個々の経験にどのような影響をもたらしているのかを検討することで、特に一世と二世の世代間の関係性や異人種間の対立や連帯などの表象を中心に、人種/ジェンダー/階級などの要素がどのように絡み合っているのかを明らかにしている。

論の構成や分析などに、やや不足する点も認められるが、論文全体の価値を損なうものではない。英語で書かれている本論文は、初期アジア系アメリカ文学の見過ごされてきた越境性について深く掘り下げ、国際的なアジア系文学研究に多くの示唆を与える研究とも言える。

以上により、本論文は博士 (言語文化学) の学位論文として十分に価値あるものと認める。